

介護サービスNPOの先鋭 ひばり会

介護保険制度がスタートして十ヶ月。ボランティアな市民活動から発展してきたNPO法人も、介護保険制度の中では社会福祉法人や民間企業と同じように、介護サービスを担う事業者として大きな期待をもたれている。しかし、参入にはまだ時間が必要と足踏みしているNPO法人も多い。そんな中で元気のいいNPOを見つけた。「私たちの活動で介護サービスNPOの道が開ければ！」と言うNPO法人ひばり会副理事長の平木千紗子さん（47歳）をたずねた。（文・藤澤利枝）

栃木県今市市のNPO法人「ひばり会」は、介護保険のサービス事業者として宅老所（デイサービス）と痴呆性老人のグループホーム、そして介護保険の対象サービスではないが市からの委託を受けて、在宅の高齢者や障害者への給食サービスを行っている。正職員のスタッフが六名、パートスタッフが十名、そして二十名以上のボランティアスタッフが会の活動を支えている。

「とくに給食サービスはボランティアの方々にと頼るところが非常に大きい」と平木さんはNPOにおけるボランティアスタッフの重要性を強調する。土日の配達には、市役所の職員や高校教諭、企業のサラリーマンなど男性も配達ボランティアとして活動してくれるという。この給食サービスは今市内ならどこでも



「人は捨てたもんじゃない」「社会は捨てたもんじゃない」。平木さんの常套句。

配達するため、十五キロも離れている配達場所もある。市からの補助金が出ているとはいえ一食四百円で配達するサービスの採算は合うのだろうか。平木さんは「大変な活動なのよ。本当に非営利の活動」と笑って答えるが、真剣な顔で続ける。「でもやめられない。何とかしてつなげようってがんばっているの。一歩踏み出して行動して人を集める。必死になつてやっているから、ついてきてくれる人がいる。NPOって、そんなあったかい気持ちが集まってくる。これが有限会社だったらこんなには人は集まってこないでしょう」。

NPOの目的は助け合う社会づくり

NPOに集まるスタッフはお金でつな

NPOはここまでできる！



宇都宮市内から車で40分。グループホームひばりは住宅街の一角にあり、築後数十年たった普通の家屋。

がっているわけではない。だからNPOのマネージメントは大変だ。平木さんは「普通の企業なら『お給料を払っているのだから働いてください』って言うけど、ボランティアスタッフに対してそれは言えないわけですよ。だからひばり会の中で有給スタッフが一番下。ボランティアの方々に気持ちよく働いてもらうために、有給スタッフが動く。つまらないところには人は集まらないから、バーベキューをしたり、飲み会をしたり、活動も達成感の得られるものをしてもらっている」とボランティアの方々に気をくばっている。さらに「ひばり会の活動は、給食サービスや宅老所のサービスを受けている人のためだけに行っているのでは

ない。ボランティアとしていろいろな人に出会い、活動を通して『私たちはお互い助け合って生きていく』という社会づくりへの参加ができればいいと思う」とボランティアという手段を通して得られるNPO本来の目的を話す。ひばり会のある男性ボランティアも、仕事の合間のほんの少しの時間だけれど、地域社会と関わることができてよかった」とこの活動に意義を見出してきているという。

グループホームのための改修費獲得

介護保険導入にあたりひばり会がはじめたのはグループホーム専用の家探しだった。NPO法人の介護保険参入は認められたが、資金源の乏しいNPO法人では事業のための基盤整備が難しい。とくにグループホームの場合、社会福祉法人が建設する場合には国庫金から建設費として四千万円が助成されるのだが、まだ社会的な信用を得られていないNPO法人では助成金がでない。「やっぱり貧乏人には無理なのかなあと意気も沈みかけた頃、突然、運がバリバリ向いてきた」と平木さん。グループホームにふさわしい建物を探し始めてから二年目、以前下宿屋として使われていた民家を提供してくれるという人が現れた。部屋数も十分あり日当たりもいい。ただグループホームにするには改修が必要だった。平木さんは改修費獲得のため、西へ東へ奔走した。そしてNPO法人としては第一号で県単事業である、既存施設活用型基盤整

備促進事業」の適用を受け、改修費六百万円のうち県と市から五百万円の補助を受けられることになった。資産もないひばり会に対して、しかも賃貸契約の建物に対してこれだけ大きな額の補助が出たというのは、ひばり会のグループホームに対する熱い思いと、県や市の首長、そして行政担当者の協力と理解があったからだろう。平木さんも「行政マンの理解と熱意はこれほどまでに市民の福祉活動を生かす。他のNPO団体も、五百万円の改修費を得られると知れば、すぐに第二、第三のグループホームを誕生させられるだろう」と期待する。このひばり会の動きは他のNPOに道を開いたことになる。

「行政が一枚噛むだけでこのように市民活動は一気に進む。市民の一步と行政の一步、この歩みが社会を大きく変えていく」と行政との協働体制をとりながらも「老いても、病んでも、窮しても、助け合って、安心して暮らせる社会を自分たちでつくっていくことの大切さ」を強く訴える平木さん。「すべてのNPOに共通するものは、あったかい社会づくり。障害者・環境・教育・まちづくり・外国人・高齢者とNPOによってアプローチの方法は違っても、最終的な目的はみな同じ。自分たちの社会は自分たちでつくるもの。人まかせや行政だけにまかせたりしない。地域での困りごとは地域の中に解決策がある」。平木さんの言葉に、NPOがこれからの社会を大きく変えていく核になっていくことを実感させた。